

名作歌舞伎全集

第三卷

名作歌謡全集 三

梶原平三 誉石切
源平 魁躑躅
鬼一法眼 三略卷
壇浦 兜軍記

御所桜堀河夜討
ひらがな盛衰記
新薄雪物語

蘆屋道満 大内鑑
苅萱桑門 筑紫轢
和田合戦 女舞鶴
敵討 襪錦

昭和

東京創元新社

名作歌舞伎全集

第3巻 丸本時代物集二

昭和四十三年十二月十日 発行

監修者

河竹登志夫
郡司正勝
山本二郎
戸板康二
利倉幸一

発行所

株式会社

東京創元新社

代表者

秋山孝男

(162) 東京都新宿区新小川町一丁一十六

電話 (〇三) 二六八―八二三―

振替 東京 一五六一五

印刷・株式会社 金羊社

製本・株式会社 鈴木製本所

用紙・株式会社 富士川洋紙店

写真版・(株)興陽社、(株)方英社

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

目次 (名作歌舞伎全集第三卷 丸本時代物集二)

梶原平三誉石切	(石切梶原)	……………	(装置図	萩原勝美)	……………	三
---------	--------	-------	------	-------	-------	---

源平魁躑躅	(扇屋熊谷)	……………	(装置図	八木恵一)	……………	三
-------	--------	-------	------	-------	-------	---

鬼一法眼三略卷	(菊畑・一条大藏譚)	……………	(装置図	萩原勝美)	……………	四
---------	------------	-------	------	-------	-------	---

壇浦兜軍記	(阿古屋琴貢)	……………	……………	……………	……………	九
-------	---------	-------	-------	-------	-------	---

蘆屋道満大内鑑	(葛の葉)	……………	(装置図	高根宏浩)	……………	一〇
---------	-------	-------	------	-------	-------	----

苅萱桑門筑紫轢	(苅萱)	……………	(装置図	高根宏浩)	……………	一一
---------	------	-------	------	-------	-------	----

和田合戦女舞鶴	(板額)	……………	(装置図	高根宏浩)	……………	一六
---------	------	-------	------	-------	-------	----

敵討檻樓錦かたきうち つづ れの にしき（大晏寺堤）……………（装置図 釘町久磨次）……………一九七

御所桜堀河夜討ごしよざくらほりかわ ようち（弁慶上使）……………（装置図 八木恵一）……………三七

ひらがな盛衰記せいすいき（盛衰記）……………（装置図 萩原勝美）……………二四三

新薄雪物語しんうすゆき ものがたり（新薄雪）……………（装置図 八木恵一）……………三〇三

解説

戸板康二

校訂について

郡司正勝

山本二郎

写真提供―演劇博物館、演劇出版社、大谷図書館

梅村豊、吉田千秋、鳥越文蔵

梶^{かじ}原^{はら}平^{へい}三^{ぞう}誉^{ほまれ}石^{いし}切^{きり}
(石切梶原)



梶原平三誉石切

戸 板 康 二

原作は「三浦大助紅梅鞆」といい、享保十五年二月十五日初日の竹本座に書きおろされた浄瑠璃で、作者は長谷川千四と文耕堂である。

源頼朝が石橋山に敗れて再興をはかるのに当たって、三浦大助義明の一族はこの挙に加わり、畠山重忠、梶原景時もまた頼朝の側について、一見平家のために三浦氏の居城を攻めるように見せ、義明を助けて、大庭兄弟をほろぼすという筋の五段つづきの時代物である。

三浦大助は節分の厄払いの文句にもあるように、百六歳の長寿を保ったと伝えられる武將で、四段目の切で、大助が紅梅の手綱を持って出陣するところから本文の外題は出ているのだが、歌舞伎では三段目の切の、いわゆる「石切梶原」の場だけが残った。

普通この場を、「梶原平三誉石切」といい、十五代目市村羽左衛門の場合は定紋をよみ入れて「名橘誉石切」という外題にしていた。

この芝居は、三段目の切として、戸外で演じる特殊例であることと同時に、歌舞伎浄瑠璃を通じてつねに嫌われる役になっている梶原景時を、智勇ともに秀でた人物として扱っているのが珍しい。通俗史では、梶原を腹の黒い悪人として「げじげじ」と仇名で呼んでいるのだが、この作では、それは下知(命令)をくだしたからだと弁解し、かつ三段目の段切れ近く「それ故に世にうとまれ、佞人讒者と指さされ、死後の悪名受くるとも」と梶原自身にいわせたりしている。この作者は、憎まれっ子の梶原景時のための弁護人である。

場面は、鎌倉星合寺となっているが、これは鶴ヶ岡八幡宮の別当寺なので、今は普通鶴ヶ岡八幡の社頭という装置にして演じる。幕があくと浅黄幕があって、それをふり落とすと、梶原がもう坐っているような省略もあるが、普通は花道から出て、あとでまた幕外の引っ込みを見せる。参詣に來た筈の梶原が一度も鳥居をくぐらないのはおかしいが、そういう理屈は、歌舞伎では通用しないのである。

梶原は白綸子の着附に、矢筈の紋をぬいとりにした織物の上下、かつらは生締で、典型的なさばき役である。見せ

場は三度とも、刀をつかうところで、まず大庭の依頼で、すわったまま、名刀を見ること、次にその刀で二つ胴を切ることに、最後に同じ刀で石の手水鉢を切ること、この三つである。

りりしい役だから、二つ胴を切ったあとの「苦りきったる」で刀をふき上げる形や、六郎太夫親子に頼朝を救った時の物語を扇をつかってするところが役の眼目だが、六郎太夫にやさしい声をかけ、「袂に露をあやなせり」で愁いになるあたりに、俳優のうまさがいじみ出なければいけない。

近年では十五代目羽左衛門、初代吉右衛門、初代鴈治郎などが当り役としてしばしば演じたため、ポピュラーな芝居になったが、明治時代には、団十郎の嫌いな二股武士の役であるため、初代左団次が演じたくらいで、あまり上演されなかった。大正以後復興した狂言といえよう。

歌舞伎ではじめて演じたのは、安永四年九月京都早雲座で、初代嵐雛助の梶原だったが、江戸では寛政七年六月桐座の市川八百蔵の梶原が最初である。以前は、原作の星合寺の小松原という場面にして、梶原が松風をききながら茶の湯の手前を見せる趣向などがあったのを、八幡宮の社頭に直したのは三代目中村歌右衛門といわれている。

なお初代吉右衛門は、剣道家に教えられて、手水鉢を切

る時にふくさを石の縁に置くとか、二つ胴の時に柄に下げ緒を巻くとか、いろいろな故実をとり入れていた。吉右衛門は六郎太夫親子を下手に立たせ、その影を手水鉢に投じ、二つ胴にたとえていたが、羽左衛門は手水鉢の両側に親子を立たせ、水に影がうつっているのを二つ胴に見立てて、向う側で石を切り、割れた手水鉢の間から前へ飛び出すという派手な型であった。三宅周太郎氏は「桃太郎のようだ」と評したが、これも悪い型ではない。

場面としてのクライマックスは、石を切ったあと、「アレもし父さん」「剣も剣」「切り手も切り手」という三人の糸のつた動きのところであろう。「吃又」同様、奇蹟を強調した演出である。

六郎太夫には述懐、梢には一旦家へ行って帰って来て父の危難を見ておどろくドキがある。立敵の大庭には、「大庭は大名」のいいまわしと、引つ込みにしどころがあるが、ドスを利かせて「大庭はデエ名」といったりする型は、品がなく見える。引つ込む時に六郎太夫を足蹴にしたりする人もあるが、あんまり安っぽいことはしないほうがいい。逆に、俣野は、荒若衆で、もう少し安手にしてもいいのだが、勿体ぶって演じる人が多いようだ。俣野のしどころは、「見事遊ばせ、御苦労ながら」のくだりである。

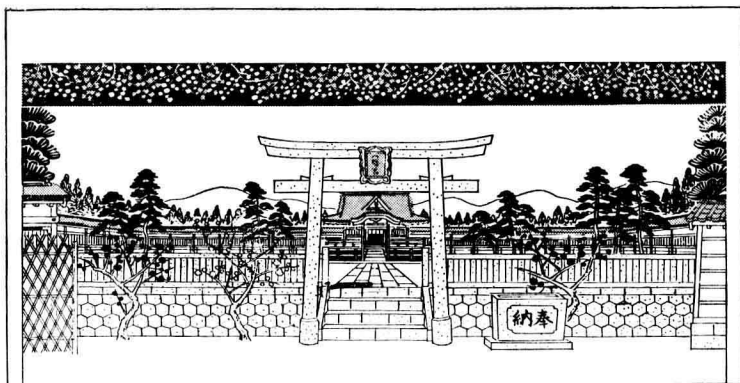
二つ胴で切られる呑助の役は、三枚目の俳優の持ち役

で、酒づくしのセリフをいうことにきまっている。大庭のところへ文箱ふばこをもつて来る役には、いい役者が御馳走でつとめるのが通例である。

内容は決して深くはないが、様式的な演技のおもしろさで見せる派手な一幕で、春芝居などには適当した狂言といえるのである。

戦争中に、歌舞伎座でこの前の青貝師あおがひしの内の場うちを一度上演したことがあった。梢しほ（原作は小ずえ）のいいなずけの文蔵が頼朝の加勢にはせ参じるために三百両の金がほしく、八丁はちちょう磯いそ喜平次きへいじの女房を廓の女にしたてて、女を意地で買うための金と称して、梢にたのみに来るところである。

なお、六郎太夫は七十九歳、四段目の切の衣笠城きんがさじょうであきらかなになるが、じつは三浦大助の長子で、父の身がわりになって死ぬ。また梢の姉は、三段目から四段目にかけて、狐がついたため一時狂女になっていた畠山重忠の妻玉房御前たまざきごぜんにつきそうお犬という腰元として活躍する。（狐に犬をからませたのも、作者の機智であらう）



鎌倉星合寺の場

鎌倉星合寺の場

役名 梶原平三景時。大庭三郎景親。俣野五郎景久。山口十郎政信。河嶋八郎近重。岡沢将監頼国。森村兵衛宗連。初瀬修理之助。二階堂五郎。光村左衛門尉。辻井平六郎。飛脚、早助。囚人、呑助。侍。仲間。青貝師六郎太夫。娘、梢。

本舞台一面の平舞台、正面上の方筋堀、観音仏殿の遠見。上手よき所に石の手水鉢、尤も切り割る仕掛あり。石燈籠、所々に紅白梅の立木、日覆より梅の吊枝を下ろし、下手の前竹矢来、この前に安土、これに的を掛けあり、上下に床几四脚、この前に毛氈を敷きあり、すべて鎌倉星合寺境内馬場先の体。上手に一二三四の敵役大名、下手に一二三四の立役大名、いずれも衣裳上下、肩を脱ぎかけ、弓矢を持ち立ち懸かりいる見得。大拍子にて幕あく。

立一 いかに方々、今太平とは申しながら、いつぞや蛭ヶ小島より行方の知れぬ源氏のやから、
立二 時節を待って、旗揚げなさんもはかられず。

立三 それゆえにこそわれ／＼も、かく射術をはげみおれど、

立四 今にも知れぬ敵の様子、油断ならざる事でござる。

トこれにて敵役大名四人進み出て、

敵一 イヤ／＼、さように臆病風に誘われて、アノ頼朝づれを心に掛けることはござらぬて。

敵二 万一、軍勢をかり集むるとも、たかの知れたる集まり勢。

敵三 諺に申す蟪蛄が斧、もし合戦と相ならば、

敵四 日頃鍛えしこの弓勢、高名手柄は目のあたり、すなわち勝鬨、

四人 あぐるでござろう。

トこれより床の浄瑠璃になる。

へかゝる折から、別当所より立ち戻る、大庭の三郎、俣野の五郎、ゆう／＼として出て来る。

ト鳴物になり、向うより大庭三郎、衣裳上下、好みのこしらえ、俣野の五郎、同じなりにて、侍二人つき添うて出て来る。

立一 これは／＼大庭どの、俣野どの、御兄弟づれでの御参詣。いずれも無礼なきよう、心得召され。

俣野 イヤ、いずれもには、当山の利生を願って、高名手柄をせんために、この安土にて射術の稽古召さるゝか

な。

敵一 仏の利生は兎も角も、蛭ヶ小島に流人の頼朝、謀叛をおこして天下を騒がすこの時節、それゆえにこそ、かく武芸をはげみおります。

大庭 いかさま、それはよい心がけ、しかし流人づれの頼朝如きが、わずか三百騎にたらぬ軍勢を拾い集め、この大庭に刃向かいしは、富士の山をせまる土龍同然、生捕りにして日向責め、皮引きむいてくれんずものを、取り逃がしたは残念至極。

敵一 今にもあれ、落ちのびし在所が知れなば、すぐさま向かつて一合戦。

敵二 俣野殿が真田の与市を討ちとりし如く、高名手柄が致しとうござる。

立二 しかしその折からは夜戦ゆえ、如法暗夜の事なれば、上のが俣野殿やら下のが真田か見留めもつかず、たがいに関しき組み敷かれ、危うき勝負のそのうちに、

立一 御運がよさに勝戦。

敵一 これはしたり、御自分達は俣野殿の高名をなじらっしゃるか。

立一 イヤ、全くもって。

敵一 でも今の詞のはし／＼、今一言言ってお見やれ。その座は立たさぬ、何とでござる。

立三 これはしたり、由なき争い、真田を討ち取り召されしゆえ、六波羅殿の御感に預かり、比類なき高名と世上の取沙汰。

大庭 そりや言わいでも知れたこと。首取ったは弟の手柄。チトおのくにも、あやかり召され。

立一 成程、こりやあやかりたいものでござる。

トこの時向うにて、

呼び 景時参詣。(ト呼ぶ)

大庭 なに、景時の、

皆々 参詣とな。

トこれより床の出語りになる。

へ音なううちに向うより、勇氣は鬼も取りひしぐ、

梶原平三景時。

ト大小入りの鳴物になり、向うより梶原平三、衣裳上下大小草履、あとより上下形の侍四人、若侍小姓仲間三人に文台、短冊箱、提重、茶、弁当、毛氈を持たせ出て、花道にて、

梶原 実に仙方の雪なりと、古人の詠せし詩を、目前に見る大慈の庭、匂いを誘う春風に、やがて散り行く無常の教え、ア、心すゞしき眺めじやなア。

俣野 これはく景時どの、今日御参詣と存じなば、御同道致そうもの。

大庭 存ぜぬ事とて、お先へ推参致してござる。

梶原 これは大庭どの俣野どの、うち揃うて御信心な儀でござる。いずれもには当境内の安土にて、射術のお稽古とは神妙な儀でござる。

敵一 梶原殿には、

皆々 まずくこれへ。

梶原 しかば御免。

へしからば御免とうち通り、一礼なして座に直り、

ト舞台へ来りて、目礼して真ん中へ住まい、

誠にこのたび石橋山の戦いに味方の勝利、これと申すも、弓矢を守る当山の利生。猶この上ともに、仏の力信ずるに如くはござらぬ。

俣野 イヤく梶原どの、観音の力を頼んで戦いに勝つとは、武士の詞に甘い。兄景親はじめ、かく申す俣野の五郎、終に普門品一卷も読んだ事はなけれども、鬼神と呼ばれし真田の与市を討ちとりしは、我が剛力のなすところ、平家の太刀風に恐れて、頼朝が尻に帆かけて逃げ行きしも、いうに及ばぬ兄大庭が軍術に秀でしゆえ、假令仏と思えばこそ、氣ばらしがてらのこの参詣、これは浮世の法楽というもの。それに何ぞや、観音の利生にて、勝つまじき戦いにも勝ったような御一言、人が聞いても不外聞、チトおたしなみ召されたがよい。

へあざ笑えば、

梶原 ホ、ウ、異な事が虫に障り、御機嫌を損ねしは梶原が言い下手、まっぴら御免下され。したが神仏の力を頼めば武士の不外聞、一分のすたるということ、弓矢八幡、この梶原は只今まで存ぜんんだ。これを思えばその昔、坂の上の田村麿が、鈴鹿山にて鬼神をしたがえしも観音の利生を蒙り、外聞を失われ、さぞ後悔に思われたでござろう。ム、ハ、ハ、ハ、。

へ流石鬼神に横道なき、詞のつやぞ誠なる。

いかさま御両所の武功によって、この度の合戦にうち勝つたればこそ、かようなのどけき此花を眺めらるゝと申すもの、幸い持ち合わせたる小筒提重、それ、用意いたせ。

侍 ハア、。

へはつと答えてこなたより、携え持ちし高蒔絵、美を尽くしてぞ見えにける。

ト若侍毛氈を敷き、仲間并当箱提重を取り出し、梶原益を取り上げ、

梶原 イザ、一献召し上がられよ。

トこれにて大庭侯野、順に呑む。このうちよろしく捨てりふ。

へ世の中の譬えに洩れぬ身の上や、宝は時のさし合

わせ、惜しまぬもまた娘ゆえ、深き心は直焼刃、刀を包み二人連れ。

ト向うより青貝師六郎太夫、羽織着流し、風呂敷包みの刀を持ち、あとより娘槽、世話娘の拵えにてつき添いつて来り、

六郎 オ、娘、向うにごさるがお殿様じゃぞや。サ、早う来やれ。

へほた／＼悦び走り寄り、

ト兩人舞台へ来る。大名皆々これを見て、

敵一 ヤア見馴れぬ町人、何ゆえ大庭殿の、皆々 面前へ。

六郎 ハイ／＼、恐れながら大庭様へお願いがござりまして。私どもは帷子ヶ辻に住まい致す、青貝細工師の六郎太夫と申す親仁めにござります。かねて御所望に預かりました所持の刀、急に金子の入用がござりまして、さし上げたき願ひゆえ、今日御参詣をお見かけ申し参りました。この刀を召されて下さりましょうなら、へい／＼、ありがとう存じます。

へ思い込んでぞ願ひける。

大庭 ム、聞き及ぶ青貝師の六郎太夫とは其方か。所持の刀売りたいとは、某がかねての望み重畳々々。幸いに居召さるゝ梶原殿は本阿弥勝りの目利者、究竟の折

からなれば、心にさえ叶うたら、望みの通り金子を呉りよう。

六郎 ありがたいござります。ソレ娘、早う殿様へ持つて行きや。

梢 アイく。

ト梢、風呂敷より袋入りの刀を出し、立ちかゝるを、

大庭 コリヤく女、それなるお方へ持参せよ。イヤナニ

梶原殿、御苦勞ながらお目利き頼み存ずる。

へ言うに娘は利発者。

梢 これはく冥加ない、私風情が刀の目利きを、誰あ

ろう梶原様が遊ばし下さるとは。コレ父さん、ありがた

いことではないかいなア。

へありがたや仕合わせと、会釈もおぼこ憎気なき、

平三景時につこと打ち笑み、

梶原 六郎太夫とやらんが所持の刀、いわば彼が家の重

宝、とやかく申すも無遠慮千万、イヤ、この儀は御免下

されい。

大庭 イヤ、御辞退かえって迷惑致す。貴殿がお目利き下

さらねば、彼が願ひも叶わず。是非ともこの儀お願い申す。

俣野 左様々々、兄がかねく望みの刀、拙者も共々お願ひ申す。

梶原 さほどのお頼み、辞退致すは却って失礼。しからば拝見つかまつろう。

へずんと立って小蔭なる、手水鉢にさしかゝれば、

六郎 太夫声をかけ、

六郎 アモシ梶原さま、私づれが所持の刀、お目利き下さ

れるさえ憚りあるに、お手水とは恐れあり。

梶原 イヤく、たとえ持人は誰にもせよ、名作の刀とあ

れば、武士の尊むところ。文は鏡武は剣と、二つに止まる日の本の神宝、おろそかにはなり難し。

へ礼儀乱さぬ清めの手水、剣の包み押しいたゞき、

トこのうち梶原手を清め、刀を押しいたゞき、抜きかけ

こなし。

へ抜き放せば、雲なき夜半の月の影、漲る滝を照ら

せるかと、怪しむばかりの剣の焼刃、切先物打はど

き元、一点くもらぬ名作物。

ハテ、見事。

へ思わず知らずうち守り、

天晴稀代の名剣。身不肖なれど、平三景時、数多の刀を

見たれども、かような名作手にふれしは今が初めて。尤も無銘に見ゆれども、さだめて出所は。

ト思入れあつて氣を替え、

さぞと白刃のこの剣、買い求めて大庭どの、家の宝に致

されよ。

へ詞の齒ぎれも流石の目利き、大庭もほとんど機嫌の体。

大庭 さほどまでに御賞美あれば、確かな道具、某も大慶
大慶 コリヤ親仁、其方が望みに任せ、刀は購めて遣わ
そう。シテ、価は何程じゃ。

六郎 ハイ、ありがたいそのお詞、金子の望みは、の
う娘。

ト言い兼ねるこなし。梢思入れあつて、

梢 ちゃつと言わしやんせいなア。

六郎 ハイ、なにとぞ三百両にお購め下さりましよう
なれば、ありがとう存じます。

大庭 オ、三百両とはよい出様、梶原殿のお目利きを願つ
た手前もあれば、望みに任せ求めて取らす。コリヤ、
家来ども、あの者に金子を取らせよ。

侍 ハ、ア。

へはッと答えて近習の侍、小判の包み取り出せば、
ト供侍台に載せし三百両、六郎太夫の前へ出す。

へ物に差し出る侯野の五郎。

侯野 コリヤ待て。イヤナ兄者人、ちと念が足り申
さぬ。よしまたこの劍の出来塩梅、草薙の宝劍、村雲の
御劍にもまさる上出来の品にもせよ、切味が悪くては鯉

かきも同じこと。

敵二 いかさま、侯野殿の言わるゝ通り、試さぬうちは重
宝とは申されまい。一応も再応も御吟味召されたが、
皆々 よくござろう。

へ遠慮もなく言い放せば、梶原もむっとせしが、心
の了簡聞かぬ体、六郎太夫は氣の毒顔。

トこのうち梶原は家来に言いつけ、文台へ短冊箱を取り
寄せ、控え居る。

六郎 イヤもうし侯野様。憚りながら切味の善悪は見分に
もあるべき事。その上にこの刀、二つ胴に敷腕は、豆腐
切るよりいと易しと申し伝えた重宝でござりまする。

侯野 ヤアだまりおろう。三百両の金が欲しさに、さよう
な品を誠しやかに言いくるめる親仁、押売りしようとは
憎きやつめが。

へしかりつけるを梶原引きとり、

トこれを梶原見兼ねたる体にて、

梶原 イヤナニ御両所、梶原が目利き致せしその刀、お求
めなくては彼も本意なく思うでござろう。

立一 何さま、梶原殿のお目利きの一ぶんも如何。

立二 この上は死罪定まる科人あらば、

立三 引き出して試しもの、二つ胴の切味、

立四 御覧あつては如何でござろう。

大庭 実^げに尤も。誰かある、獄屋へ参り、死罪の者を引立て参れ。

侍 ハ、ア。

へかしこまったと走り行く。

ト供侍一人下手へ入る。

へこなたの道より息^{いき}せきと、飛脚と見えて旅^{たびざむらい}侍、

大庭が前に手をつかえ、

ト向うより早助、飛脚の拵^{しら}え、大小、状箱を首に掛け出て来り、すぐに舞台へ来て、

飛脚 ハッ、拙者は伊東入道の家来谷山早助と申す者、先

刻お屋敷へ参りしところ、これにと承り、直ぐに参りし

火急の御状、イザ、御披見^{ごひけん}下さりましよう。

へ言いつゝ書状差し出す。

ト状を出す。俣野受け取る。

大庭 遠路のところ、大儀々々。

俣野 伊東方より急用とは気づかい、イザ、御披見下されい。

ト大庭、状を読むことあって、

大庭 コリヤ頼朝には、三浦の大助^{おほすけ}を頼み、衣笠城^{きささぎじょう}へ立て籠^{かこ}もったとある、この文^{ぶん}体^{てい}。

敵一 先達て土肥の杉山より、行衛^{ゆくゑ}の知れぬ頼朝めは、

敵二 主従七騎にて真鶴^{まがね}ヶ崎より落ち延びしとの風聞。元

来伊東入道とは、人も知つたる遺恨^{いこん}ある仲。

敵三 それゆえにこそ早速^{ささ}の注進。イデ、われ／＼も出陣して、頼朝めを討ち取りくれん。

敵四 いかにもわれ／＼が武名を顕わす時節到来。いずれもござれ。

敵四人 ソレ。

ト立ちかゝるを、

立一 アイヤ、いずれもそのように、血氣にはやるは匹夫^{ひつぷ}の勇^{ゆう}。

立二 立ち騒がずと、

立四人 お待ちなされい。

敵一 ではござれども。

ト又行きにかゝるを、

大庭 アイヤ方々、お騒ぎあるな。拙者思う所存もござれば、まず／＼お止まり下されい。

へ引き留め居たるそのところへ、

ト下手より袴形^{かまがた}の侍出て、

侍 申し上げます。大勢の獄屋のうち、帳面を吟味致せしところ、死罪に極まる科人はたゞ一人、二つ胴の御^ごためし、いかゞ計らいましようや。

へ伺えば大庭三郎。

大庭 某が刀を求めんとて、落着^{うちやみ}もせぬ科人を切られもせ

まい。コリヤ親仁、今日はこの刀を持って帰れ。

へと言ひ放され、六郎太夫は当惑の、色目見て取る娘の梢。

梢

サア、父さん立たしやんせ。とても叶わぬ願ひの筋、よしない事を言つて居る手間で、わたしがソレ、ナ、今の所へ奉公にさえ行けば、望みの金はい調うじやござんせぬか。苦に病まずと、早う戻つて談合して下さい。

へ諫めも親の氣休めに、孝行見えて哀れなり。六郎太夫は最前より、さし俯向いて居たりしが、横手を打つて、

六郎 オ、それく、大事の事を忘れていた。十年ばかり以前の事、伊東殿の御方より抛なき御所望にて、刀を御覧にいれし時、試みのためしもの、二つ胴を切つたりとの、極めの証文下されしを、常は刀に添えおくを、参りがけにとり急ぎ、はつたりと失念、取り残して参りました。只今娘を取りに遣わし、各々様の御覧に入れましよう程に、その上にてその刀、何卒お購め下さりましよう。

大庭 すりや、伊東殿が添えられたる、二つ胴の極め書がある申すか。片時も早く取つて参れ。

六郎 只今すぐに取り寄せましよう。コレく娘、大儀な

がら家へ行き、証文を取つて来てくれ。

梢 アイく。

六郎 コリヤ娘よ、アノ仏壇の下戸棚、小引出に入れてあるぞや。

ト梢の顔を見て、暇をい言うこなしあつて、大事にかけて持つておじや。必ずともに落としやんな。

梢 気づかいさんすな。つい往て来るわいな。

六郎 オ、大儀じゃのう。

梢 父さん待つて居て下さんせ。

へ小棲からげて立ちかゝれば、

ト花道へツカくで行き、つまずく。

六郎 アコレ、危ない。どこも怪我はせぬか。

梢 どうもせぬわいな。

六郎 何ぼ遅うてもよいぞや。イヤ、大儀じゃのう。

梢 アイく。

へ我が家をさして急ぎ行く。娘が影を見送りて、大庭が前へずつと出で、

ト梢向うへ入る。六郎太夫のび上がり見送り、こなしあつて下に居て、大庭へ思入れあつて、

六郎 改めて大庭様へ親仁めがお願ひがござります。胴試しの今一人は、この親仁めをお加え下されて、早う刀の切味を御覧遊ばし、三百両の金子、下し置かれましよう